

## 漢文訓読とは何か？

---

漢文訓読(かんぶんくんどく)とは…「漢文を日本語として読む」ことです。

日本に漢字が入ってきたのは今から1500年ほど前。5世紀から6世紀頃と言われています。それまで、日本には文字がありませんでした。

日本と同じように、古代、中国の周りの国々は、中国から漢字を輸入しましたが、日本だけは漢字を「日本語の読み方」で輸入してしまったのです。

たとえば、「毛」という漢字があります。「モウ」と読む字です。他の国はこの字を「モウ」という読みのまま輸入しました。ところが、古代の日本人はこの字に、日本語である「け」という意味を当てはめ、「け」と読むことにしたのです。こうして、日本人たちは自分たちが表現したい言葉に自由に漢字を当てはめていくことができました。

同時に日本人たちはまた、「モウ」という読みもそのまま残しました。そしてそれを自分たちが話す日本語に「読みだけ利用して」使い始めました。「も」というひらがなは、「毛」をくずして書いた形からできています。こうしてひらがな・カタカナが誕生しました。

漢字をここまで自分たちの言葉に取り入れて利用した民族は日本人以外にはいません。漢文訓読法は、上記の読みと仮名を利用した、「漢字を同じ意味の日本語に置き換え、また必要なときは仮名で補って読む方法」のことです。それは日本人が生み出した、日本人にとっての最高の漢字理解法なのです。

---

## そのまま読む

---

さて、前項までは漢文を実際に読む前の準備段階でしたが、ここからいよいよ漢文を読んでいくこととなります。

といっても、別に難しいことはありません。あまり肩を張らずにそのまま読んでいきましょう。

前項までの説明のとおり、日本人はすでに「訓読み」という形で、漢文をそのまま読めるような工夫をしてきました。ですから、音読み・訓読みを駆使すれば、漢文をそのまま読める場合も多いのです。

例えば、

## 江 碧 鳥 逾 白

有名な唐の詩人、杜甫の「絶句」という詩の、最初の部分です。どうでしょう？読めますか？おそらくたいの人は「江」「鳥」「白」という字は知っているでしょう。2文字目の「碧」と4文字目の「逾」はどうでしょうか？あわてず騒がず、漢和辞典を調べましょう。意味はちゃんと載っています。

「碧」という字が「ヘキ」と読むことを知っている人なら音訓索引で「ヘキ」を調べます。読みが分からない場合…この字は部首が「王(玉)」なのか「石」なのかわかりにくいのですが、まあ両方調べてもそれほど手間はかかりません。正解は「石」部の9画。音読みは「ヘキ」訓読みは「みどり」。青緑色の宝石を表す字で、転じて青みがかった緑色の意味です。

「逾」はどうでしょう？こちらは「しんにょう」が部首というのはわかりやすいと思います。読みは「ユ」。意味は「こえる」「はるかな」「いよいよ」といった所が書かれていると思います。文脈から判断すると「いよいよ」が良さそうです。

ところで、知っているはずの1字目の「江」も一応漢和辞典を調べてみましょう。この字は「え」と読む、川を表す字だと思っていた人が多いと思いますが、漢和辞典を引くと、「長江(揚子江)」のこと、と書いてあるはずですが、もともとこの字は古代中国人が「コウ」と読んでいた「長江」を示す固有名詞だったことが分かります(同じように「河」という字は黄河を示す固有名詞)。これが転じて大きな河を表す字になったというわけです。このように知っていると思っている字でも、意外に元の意味は違っていたりしますから、きちんと漢和辞典で調べる癖をつけるのが良いと思います。

さて、意味や読みは調べ終わりました。ここで、いよいよ漢文を訓読してみましょう。以下の通りになります。

**江(こう)は碧(みどり)にして、鳥は愈(いよいよ)白し。**

読めましたか？漢文の大半はこうしてそのまま読めます。なにも難しいことはありません。

ただ、現代日本語ではなく、古文のように読むのが決まりなので「白い」ではなく「白し」になります。

## ひっくり返って読む字

---

漢文は元々は古代の中国語です。それを日本語として読む以上、やはり多少の無理は出てきてしまうのも仕方ないでしょう。この項では、その典型例である、ひっくり返って読む字「返読文字」について学びたいと思います。

前項の杜甫の「絶句」は第一句から引用しましたが、今度はその続きの第二句を見てみましょう。

山  
青  
花  
欲  
燃

今度は特に難しい字はありませんね。前項では言い忘れましたが、この詩(五言絶句)では、五文字の構成は必ず「二文字＋三文字」の2つの部分に分かれます。ここでは「山青」と「花欲燃」です。「山青」はそのまま「山は青し」と読めますね。問題は「花欲燃」です。

「花欲燃」をそのまま読むと「花、欲しい、燃える」となって日本語として意味が通じません。ここは英語の動詞と目的語の関係と似ています。「I love you」を直訳すると「私は愛するあなたを」ではなく、「私はあなたを愛する」になりますが、それと同じく、この場合は「燃える」と「欲す」をひっくり返します。中国語は英語と同じく「主語＋動詞＋目的語(SVO)」の形を取ります。このように目的語をとって、ひっくり返って読む動詞を日本人は「返読文字」と言いました。そこで、上記の句は以下のような読みになります。

山は青くして、花は燃えんと欲す。

読めましたか？最後の「欲す」は「ほっす」と読みます。漢文ならではの読み方です。音読みなら「よくす」と読みそうなものですが「欲しい」と同様の読みで「ほっす」と読むことになっています。英語でいう「want」ですね。

ところで、こういった返読する場合、分かりやすいように「ここは返って読むんだよ」という記号をつけることを考えた人がいます。これが「レ点」です。カタカナの「レ」を書いた部分は下から上に返って読む、という記号です。

山  
青  
花  
欲  
レ  
燃

こういった記号については「返り点について」を参照してください。

---

## ひっくり返って読む字(2)

---

返読文字は漢語を日本語として読む以上、さけられない読み方でした。前項では目的語をとる動詞について説明しましたが、ここでは否定を表す字について説明いたします。

「否定」を表す字とは、何かを否定するために書かれる字です。日本語では「～ない」という語尾を否定したい語の後につけて否定を表現しますが、漢文では否定詞は、否定したいものの前に持ってきます。

漢文で用いられる否定詞には三種類あります。それぞれ数も少ないので覚えてしまいましょう。

### (1) 存在を否定する字～「無」「莫」「勿」など

「無A」という風に使い、「Aなし」と読みます。読んで字のごとく、「Aがない」という意味になります。

### (2) 名詞を否定する字～「非」など

「非B」という風に使い、「Bにあらず」と読みます。「Bではない」という意味になります。

### (3) 動詞・形容詞を否定する字～「不」「弗」など

「不C」という風に使い、「Cず」もしくは「Cならず」と読みます。「Cしない」「Cではない」という意味です。

例:「不惑」…「惑わず」、「非常」…「常にあらず」、「無休」…「休みなし」

ところで、この字は名詞だ、動詞だ、形容詞だ、などと勝手に読んでいるのは日本人で、書いている本人の古代中国人はそれほど気にしているわけではありません。ですから、名詞を否定する否定詞が、動詞を(あるいはその動詞が示すものを)否定することもあります。この場合、**訓読するときは動詞を名詞化して読みます**。動詞・形容詞を名詞化するには「連体形」を使います。

たとえば「落」という字を否定しましょう。  
「不落」…「落ちず」(未然形+「ず」→意味:落ちない)  
「莫落」…「落つるなし」(連体形+「なし」→意味:落ちない、落ちるものはない)

というような感じになります。

逆に、「不」が名詞を否定することもあります。この場合は**名詞を動詞・形容詞化して読みます**。名詞を形容詞化するには「なり」「たり」をつけます。  
「無義」…「義なし」(義+「なし」→意味:義がない)  
「不義」…「義ならず」(義+「なり」+「ず」→意味:義がない)

いかがでしょうか。否定詞にはもっと便利な使い方が(と同時にやっかいな使い方が…)あるのですが、それは別のところで述べましょう。

さて、実は、あえてここでは触れませんでした。否定詞にはもう一つ重要な字があります。

---

## もう一度読む字

---

さて、前項で「未」だけ説明しませんでした。それはこの字がここで説明する「**再読文字**」だったからです。再読文字というのは、「**いったん読んだ後、もう一度返って読む字**」のことです。

何はともあれ、読んでみましょう。とりあえず説明を放っておいた「未」でいきましょう。

我  
未  
行

答えから先に言ってしまいますが、これは「我、いまだ行かず」と読みます。このとき、「未」という字に注目すると、なんとこの字はいったん「いまだ」と読まれているのにも関わらず、後からまた「行」を否定する否定詞として「ず」を補っています。

これが「再読文字」です。前に説明した「そのまま読む字」と「返読文字」をあわせたように読むのが「再読文字」ということです。

「再読文字」はいくつもありますが、よく出てくる字は、それほど数が多くありませんから、覚えてしまいましょう。

・「未」

「いまだ…ず」→意味：まだ…していない。

・「将」「且」

「まさに…んとす」→意味：今にも…しようとしている。

・「方」

「まさに…べし」→意味：…すべきである。

・「当」「応」

「まさに…べし」→意味：当然…すべきである。きっと…だろう。

実際には旧字である「當」「應」で出てくるので注意。

・「須」

「すべからく…すべし」→意味：きっと…しなければならない。

・「猶」

「なお…ごとし」→意味：…のようだ。

・「盍」

「なんぞ…ざる」→意味：どうして…しないのか。反語。

例：

應  
食

→「まさに食ふべし」→意味：当然食うべきだ

例：

須  
記  
之

→「すべからく之を記すべし」→意味：かならずこれを記すべきだ

例:

将  
呼  
彼

→「まさに彼を呼ばんとす」→意味:ちょうど彼を呼ぼうとした

ということで、よく出てくる再読文字はこれくらいですので、そんなに覚えるのに苦労はないと思います。もちろんこれ以外にも再読文字はありますので、何はともあれ自信のない字はすぐに漢和辞典を調べてみましょう。

余談ですが、「もう一度読む」再読文字というのは、日本人だけの感覚です。実際に漢文を書いていた漢人は、再読文字と認識していたわけではなく、彼らは「未」という字が来れば、自然に「ああ、否定なんだな」と思うだけです。日本語でも「いえ、けっして」といえば最後まで言わなくても「ああ、否定なんだな」と分かるように、彼らは「未」や「須」を「もう一度」読むわけではなく、そういった意味を持つ字として、上から順番に読んでいただけ。それを無理に日本語で読むために「再読」しているわけです。

---

## 音読みと訓読みについて

---

漢文訓読とは何か?でも述べたとおり、古代日本人たちは、漢字を輸入して自分たちの言葉に利用することに成功しました。その結果できたのが「音読み」「訓読み」です。ところが、漢字はあまりにも便利なので、「音読み」も「訓読み」も一つだけではなく、いくつもできてしまったのです。ここでは「音読み」「訓読み」の種類を説明します。

### 「音読み」の種類ー漢音・呉音・唐音

「音読み(おんよみ)」とは、漢字を古代中国で発音したままの音で読むことです。

音読みの区別にも種類がいくつかあるのですが、ここでは日本に入ってきた時期の違いを説明します。最初日本に漢字が入ってきたのは5世紀から6世紀頃。中国南部の「呉」地方から伝わったと思われます(まあ実際にはそんなに単純でも無いんですが)。この時期に入ってきた漢字の読みを「呉音(ごおん)」と言います。仏教も同時期に入ってきたので仏教用語の中には呉音で読むものが多い傾向があります。

奈良時代になると、遣唐使がさかんとなり、留学ブームが起きて漢語学習熱が高まります。日本に伝わっていた呉音は、いわば方言というか前世代の発音なので、当時の留学先である都・長安(中国北部)とはだいぶ違う読みでした。そこで、奈良時代から平安時代にはじめにかけて、唐の中央方言が輸入され、それが日本国内での正式な音読みとなります。これを「**漢音**(かんおん)」と呼びます。

遣唐使が廃止されると、日本と中国の間には正式な国交がなくなり、行き交う人も少なくなりました。それが復活するのは鎌倉時代から室町時代にかけて。この時代には仏教の中でも特に禅宗のお坊さんや書籍が日本に入ってくるようになります。この時期に中国本土ではかなり発音が変化していて、それらを「**唐音**(とうおん)」と呼びます。

たとえば「**行**」という字の場合は、

**呉音**は「**ギョウ**」…修行(しゅぎょう)、行者(ぎょうじゃ)など。

**漢音**は「**コウ**」…旅行(りょこう)、行軍(こうぐん)など。

**唐音**は「**アン**」…行燈(あんどん)、行脚(あんぎゃ)など。

全体の傾向としては、「漢音が一番正式な読みとされる」「仏教用語には呉音が用いられることが多い」「仏教の中でも特に禅宗の用語は唐音になることがある」と覚えておけば大丈夫です。漢文を読むときは例外でないかぎり、漢音で読んでいくことになります。

## 「訓読み」の種類

「訓読み(くんよみ)」とは、本来漢語を書くための文字である漢字を日本での意味を当てはめて読んだ読み方です。

ところが、元々の漢字が一文字でいろいろな意味を持つ場合があるため、訓読みも一つではないことも少なくありません。

たとえば「**生**」という字の場合…「いきる」「はえる」「なま」「おう」「き」「うむ」「うまれる」「いかす」「うぶ」「いのち」などなど。一説では150種類の読みがあるとか。これらはすべて漢和辞典に載っています。漢文を読むときはその字がどういう意味を持っているか(どういう読みをすれば良いのか)を調べるため、漢和辞典を必ず調べてみましょう。

---

## 返り点について

---

ここまで、漢文の基礎を説明してきましたが、おおかたの漢文の本には書いてあり

ながら、あえてここではあまり触れなかったことがあります。それは「**返り点**」と「**送りがな**」です。

実はたいていの漢文の本には最初にこれらの説明があつたりするのですが、はっきり言います。**漢文の習得において、返り点と送りがなは必要ありません。**というと言い過ぎだと思われる方もいるかも知れませんが、事実です。

確かに便利ではあるのですが、返り点を打つことで読んだつもりになってしまったりする人がいることや、返り点を打つこと自体に労力がかかるのでそのまま漢文を読んだ方が早いということもあります。返り点はそれほど必須な学習項目ではないのです。

**返り点とは、漢文を日本語の語順で読むために便宜的につけた記号のことです。**ところが、おおかたの漢文はもともと中国のもので返り点などついていません(なにも記号がない文章を「白文」と言います。現在読める形の活字の漢文はたいてい白文に句読点のみ打ったものが多くなっています)。ふだん返り点のついた漢文を読んで慣れてしまうと、いざ白文を読もうとしたときにかえって読みにくくなってしまいます。なので、この「漢文の初歩の初歩」では返り点のついた漢文をお勧めしません。

## 返り点

### (1)レ点

これはすでにひっくり返って読む字のところの説明しましたが、下の文字を先に読み上の文字を後に読む、という意味の記号です。返り点はすべて漢字の左下に書きます。

(あ) 読む順番	(い)
飲 2	欲 3
レ ム	レ
酒 1	食 2
ヲ	レ
	肉 1

### (あ)酒を飲む (い)肉を食わんと欲す

ついでに送りがなの説明もしておきましょう。上記(あ)のように、送りがなは漢字の右下に書きます。ふつうはカタカナです(カタカナは本来この目的のために開発された字です)。送りがなはあまりごちゃごちゃ書くとうっとうしいので、必要最低限にし

ます。助詞(ヲ・ハ・ガ・ニなど)や助動詞(ナリ・ラル・シムなど)はそのまま書きます。再読文字(もう一度読む字)の場合は…ちょっとめんどうです。

未

ズダ

レ

還

### いまだ還らず

レ点は再読文字の左下に書きます。送りがなは一度目に読む方を右下に、二度目に読む方を左下に書きます。

面倒くさいので2回目の方は振らなくてもいいと思いますが。

### (2)一・二点

レ点は一文字返るだけですが、二文字以上、上に返りたいときには一・二点(足りなければ三・四・五…点)を用います。一と書いてある字を先に読み、二と書いてある字を次に読みます。

(う) 読む順番	・	(え)
赴 3		盡 3
二		二
北 1		人 1
京 2		事 2
一		一
		待 6
		二
		天 4
		命 5
		一

### (う)北京に赴く (え)人事を盡(尽)くして天命を待つ

注意が必要なのは後から読む方が、二文字の熟語である場合。(〇〇を発掘す、××に行軍す、など)。この場合は、二点は熟語の真ん中に挟み、「|」という記号で熟語であることを明示します

(お)  
 教 3  
 二 |  
 育 4  
 子 1  
 弟 2  
 一

(お)子弟を教育す

また、もちろん一・二点は、レ点との組み合わせもありです。この場合、レ点を優先してひっくり返して読み、その後でゆっくり一・二点を処理します。**優先順位はレ点→一・二点です。**とはいえ一気に面倒くさくなりますからご注意ください。  
 では、有名な文から例を引きましょう。

(か) 読む順番	・	(き)
先 1		己 1
即 2		所 4
制 4		レ
レ		不 3
人 3		レ
、		欲 2
後 5		、
則 6		勿 8
為 10		レ
二		施 7
人 7		二
所 9		於 5
一		人 6
レ		一
制 8		

(か)先んずれば即すなはち人を制し、後るれば則すなはち人の制する所と為る  
(き)己おのれの欲せざる所、人に施すなかれ

上記の(か)のように、一点とレ点为重なるときは同じ所に振ります。また、(き)のように二点とレ点为重なるときは二点の方は下の字につけます。ここ、わかりにくいの

ですが、昔からの決まりなので覚えるしかありません。二点とレ点は絶対くっつきません。

### (3) 上・下点

一・二点を中にはさんで、さらにひっくり返って読むような場合、上・下点というのが現れます。読み方は、一・二点の順番で読み、その後ゆっくりと上・下点进行处理します。読む順番は一・二点→上・下点です。

では、例を。ちなみに下の例の「道」は「いふ」と読み、「言う」と同じです。

(く) 読む順番

不 6

レ

足 5

下

為 3

二

外 1

人 2

一

道 4

上

也 7

(く) 外人の為に道ふに足らざる也。(道＝言う、の意味)

以上、まとめると、読む優先順位はレ点→一・二点→上・下点の順です。また、上・下点がレ点と重なる場合も、一・二点と同様に、上点とレ点はくっつきませんが、下点とレ点はくっつきません。

ちなみに一・二点が足りないときは三・四点をつけるのと同じように、上・下で足りないときは間に中点を置きます(上→中→下)。

さらに、一・二点、上・下点でも足りないほど複雑な文には、その次は甲乙点(甲→乙→丙→丁…)、天地点(天→地→人)が一応ありますが、めったに使いません。逆にこんなもの使っていると返り点振るだけで手間になってしまうのでそのまま読んだ方がましです。

---

## 仮定と限定も読んでみよう

---

この項では仮定・限定・比較などを扱います。ますます英語か何かの文法書っぽい話になりますが、そんなに難しいわけではないので、大丈夫。とりあえず順々に一つずつ覚えてゆけば良いのです。

### (1) 限定形

漢文で限定(～だけ)という意味を表すときは以下の語句を用います。

「耳」

「而已」

「已」

「爾(尔)」

「已矣」

「而已矣」

いずれも「～のみ」と読みます。否定形とくっついた場合は「～ざるのみ」となります。

(あ) . (い)

此

夫

君

子

(あ)これ、君のみ

耳

之

道

(い)夫子の道、忠のみ

、

忠

而

已

矣

また、限定を表す副詞がいくつかあり、それが来たときは、後ろに上記の「のみ」シリーズの字が来ようが来るまいが、後ろに「～のみ」を補って読み、限定の意味を表します。その限定の副詞とは。

「唯」「惟」「只」「徒」「特」など。

以上は「ただ」(部分否定の時は「ただに」と読み、後ろに「～のみ」(否定の時は

「～のみならず」)をつけます。

### 「独(獨)」

これは「ひとり～のみ」と読みます。「ひとり」と言っても特に人間だけを限定するわけではありません。モノを限定するときも「ひとり～のみ」。もちろん否定の時は「ひとり～のみならず」となります。

いずれも限定の副詞です。もちろん上記の限定語尾「耳」などと結びつくこともあります。

## (2) 假定

假定、つまり「もし～ならば」を意味する用法。これも、假定を表す字句というものがああります。

### 「若」「如」「設」「假(仮)」

以上は「もし」と読みます。これがついた場合には後ろを「～ば」、「～とも(ども)」、と読みます。特に後ろに「者」という字が来ている場合は「～ば」と読みます。

### 「縦」「假令」「縦令」「假使」「就」

以上は「たとえ」と読みます。後ろは「～とも(ども)」と読みます。

どちらも後ろに来る文が推量となりますので推量の助動詞「む(ん)」「らむ」などをつけるとしっくりきます。

(う) . (え) .

若 就 (う)もし兵をひきい、後ろに向かわしめば、敵必ず応ぜん

將 彼

レ 攻 (え)たとひ彼、我を攻むるとも、我必ず彼を破らむ

兵 我

向 我

レ 、

後 我

者 必

、 破

敵 我

必 彼

應

※現在の文法では「～ば」は假定形につけますが、古文の用言(動詞・形容詞)には假定形はありません。その代わりというわけか文法表の假定形の位置にある已然形を当てはめて「行けば」などと読む人がいますが、誤りです。古文では假定には未然形+「ば」という形が正しいので、「行かば」となります。已然形の「行けば」というのは「行ったので」という意味になります。

## 読まない字

何度も言うようですが、漢文は古代の漢語です。日本語ではありませんから、漢語では意味があっても日本語では全く意味がない言葉もあつたりします。

たとえば文末に添えて調子を整えるためだけのことばなど。日本語でも「僕は男だ」と言えばいいものを「僕は男なのだ」と言うようなもの。「なの」には特に意味はありません。「～だぜ」「～ね」なども同じ。語調や抑揚のためにつけられる言葉です。

また、意味はあってもあえて日本語になおして読まない字もあります。

漢文の中には上記のような、「読まない字」がけっこう入っているものなのです。これらの「読まない字」は「助字」もしくは「助辞」(じょじ)と呼ばれています。

ところで、「形」「音」「義」が漢字の基礎である以上(漢和辞典の項参照)、これらの字も決して意味が全くないわけでもありませんし、それぞれ読みも持っています。場合によっては「助字」としてではなく、意味や音のある字として用いられることもあるので、注意が必要です。

主な助字は以下の通りです。

### ・「焉」(エン)

文末の助字。肯定や断定で使われることが多い。

「我不関焉」→「我、関せず」

疑問・反語を表す時は「なんぞ」。指示代名詞「これ」。接続詞「すなはち」と読む場合もあるので注意。

### ・「矣」(イ)

文末の助字。確認・断定を表す。読むことはほとんどない。

### ・「而」(ジ)

文中の助字。順接の接続詞。この字の前を「～して」と読み、この字自体は読まない。

「学而時習之」→「学びて時に之を習ふ」

文頭の時、「しこうして」「すなはち」と読むこともある。逆接で「しかれども」と読むこともあるので注意。

### ・「乎」(コ)

文末の助字。疑問・詠嘆などなど。形容詞を強めたりする。「か」「や」「かな」などと読むこともある。

下の「於」「于」と同じように対象を示す前置詞として用いられることも。

### ・「哉」(サイ)

文末の助字。詠嘆を表す。「や」「かな」と読むこともある。反語にも用いられる。

### ・「於」(オ)

感嘆を表す。また、関係を表す前置詞としても用いられる。意味は「～より」「～に」「～を」。

•「于」(ウ)

上の「於」とほとんど同じように用いられる前置詞。

•「邪」「耶」(ヤ)

反語などを表す文末の助字。

## 使役と受身の入門を

「使役」だとか「受身」なんて言うと、まるで英語の学習みたいな気がしますが、まあ実際漢文もいわば外国語ですからあってもおかしくないわけで…

実際、よく出てくる表現ではあります。日本では戦前まで官庁などの文書では立派だが堅苦しい文章を書いていた。今でも刑法などはそのまま使われていたりするので読むことができますが、戦後の法律が口語体で書かれているのと違っていわゆる「擬古文体」で書かれています。つまり「漢文を読み下したような」文章なので堅苦しく感じるのですが、具体的になにがそんなに堅苦しいのかというと、**使役と受身**、それに次項で触れる**二重否定**がやたらといっぱい使われているからなのです。逆に言うと、使役・受身・二重否定は漢文ではよく出てくる表現で、いかにも漢文らしい部分なのです。

前置きが長くなりました。実際には説明は簡単です。どちらも「誰が」「誰を」「どうする」という関係をつかむことだけです。

### (1)使役

漢文には「使役に使われる字」ともいふべき漢字がいくつかあります。

「教」「使」「遣」「令」「俾」など。

これらの字が出てきたときは目的語を二つとって、「使○×」→「○をして×しむ」と読みます。「○に×をさせる」という意味です。「しむ」は古文で使役の助動詞。また、○の部分は明らかな場合は略されることもあります。

(あ)	(い)	.
諸	令	
人	攻	(あ)諸人、我をして王と為なさしむ
使	擊	意味:みなが私を王にした。
我	敵	
為	陣	(い)敵陣を攻撃せしむ(目的語省略)
王		意味:敵陣を攻撃させた。

これらの使役専門字以外にも使役の意味がある文字は結構あります。そういうときも後の動詞の後ろに「…しむ」とつけて使役の意味に読む場合も少なくありません。

(う)	(え)	(お)	遣部将救援城兵	・	(う)部将を遣はして城兵を救援せしむ 意味: 武将を派遣して城兵を救援させた。
召	儒者	劉備	將者備守之		(え)儒者を召して經義を講ぜしむ 意味: 儒者を呼んで經典の講義をさせた。
命	講經	劉備	將者備守之		(お)劉備に命じて之を守らしむ 意味: 劉備に命じて守らせた。

また、使役を意味する字が使われていない場合でも、意味的に使役と思われる文の時は、適宜「…しむ」を補って使役に読むことがありますので注意。

## (2)受身

受身形も使役と同じように受身専門字があります。「被」「見」「遇」「為」「所」など。下にある動詞に「…らる」という受身助動詞をつけて受身に読みます。また、二字セットの「為所」もあります。この場合、「為A所B」を「A(のため)にBらる」あるいは「AのBするところとなる」と読みます。

(あ)	(い)	(う)	信而見疑、忠而見誹	・	(あ)信にして疑はれ、忠にして誹らる 意味: 誠を貫いて疑われ、忠義なのに悪く言われる。
遇	奪	則	後則為		(い)宝石を奪はる 意味: 宝石を奪われる
後	宝	人	後則為		(う)後るれば則ち人に制せらる(人の制する所となる) 意味: 遅れれば他人に出し抜かれる

受身を表す字としては上に挙げた助動詞(?)のほかにも前置詞的なものもあります。「於」「乎」「于」などがそれで、下の語句に「らる」をつけて受身に読みます。当然組み合わせることもあります。

(え) (お)	.
信 被	(え) 朋友に信ぜらるに道有り
乎 誅	意味: 親友に信じられるのには道がある
朋 于	
友 君	(お) 君に誅せらる
有	意味: 主君に殺される
道	

受身も使役と同じように、受身専門の字が使われていなくても、意味上受身と取れるときには、受身形で読むことがあります。忘れないようにしてください。

## 否定形のいろいろ

「ひっくり返って読む字(2)」の項で、返読文字の代表として否定の語「無」「莫」「勿」「非」「不」「弗」を取り上げましたが、そのときは単純な否定形でした。しかし、漢文の世界(いや、漢文に限らず?)ではもっといろいろな否定形があるのです…これらの字は組み合わせによっていろいろな否定のバラエティを生み出します。

### (1) 部分否定と全否定

否定に用いる「無」「非」「不」「弗」などの字と、副詞を意味する字を組み合わせることによって、部分否定と全否定を作り出すことができます。

副詞を後に置いた場合「不必」「不敢」→部分否定(～というわけではない)

副詞を前に置いた場合「必不」「敢不」→全否定(まったく～しない)

全否定の時は、読み方はそのままなのですが、部分否定の場合には、普段の否定とは意味が違うので、副詞の読み方を変える必要があります。

「必不」→「かならず…せず」 「不必」→「かならずしも…せず」

「俱不」→「ともに…せず」 「不俱」→「ともにには…せず」

「敢不」→「あえて…せず」 「不敢」→「あえて…せず」

2番目の「…は」をつけるのが一般的。3番目の「敢えて」は読みは同じですが、意味は違います。

## (2) 二重否定

否定詞を二つ組み合わせることによって二重否定になります。二重否定は前述の通り、「いかにも漢文ぽい」用法で、多用されますので、覚えてください。くっつき方によっていろいろな読み／意味になるので注意が必要です。

「無不」「無弗」…「～ざるなし」

「無非」…「～にあらざるなし」

「非不」…「～ざるにあらず」

「非無」…「～なきにしもあらず」

いずれも「～ないわけではない」という意味になります。

「不A不B」…「AざればBず」(意味:AしなければBしない)

「不A不B」…「A(副詞)、Bずんばあらず」(意味:Bしないことはない。Bせずにはおられない)

「未A不B」…「いまだA(副詞)、Bずんばあらず」(意味:いまだBしなかったことはない)

「無A不B」…「AとしてBせざるはなし」(意味:AであってBでないものはない)

「無A無B」…「AとしてBなきはなし」(意味:AであってBでないものはない)

「不可不B」…「Bざるべからず」(意味:Bしなければならない)

「不得不B」…「Bせざるをえず」(意味:Bしないわけにはいかない)

いっぺんに覚えるのはきついで、徐々に覚えていきましょう。

---